(十五日夕刊)

磐城新聞

休刊 大祭日第一第三日曜
定價〔壹枚二錢、壹ヶ月五十錢 郵稅十錢〕
廣告料二行五十錢(指定廿錢增)
發行兼編輯印刷人 蓮沼龍輔
福島縣平町田町拾六
發行所 磐城新聞社 電話五六四番

町村會議員 選擧取締事項〔四〕
其の協定內容

△文書圖畫其他に關する事項

一、選擧運動のため頒布し又は揭示する文書圖畫は次ぎの制限に依ること

(イ)文書圖畫には必ずその表面に頒布する揭示者の氏名及住居を記載すること但し名刺及選擧事務所に揭示するものに付てはこの限りにあらず

(ロ)引札、張札の類は二度刷又は二色以下とし其の大きさは長さ一尺幅七寸を超ゆざること

(ハ)文書圖畫は立札看板を除くの外これを貼付し又は揭示することを得ず但し演說會のためにする文書圖畫にしてその會場に使用するものはその會場に限りこれを貼布又は揭示することを得るもその他は一切張り札をなさざること但し會場內並に會場たる建て物及これを圍繞する墻塀等にこれを貼付又は揭示することを得且演題又は演說者の氏名の揭出等のためにする張り札はその必要の限度における大さを認む

(ニ)名刺の用紙は白色のものに限ること

(ホ)立札、看板の類は白地に黑色を用ひたるものに限り且その大きさは縱九尺(足の長さを含む)橫二尺を超ゆざること

(ヘ)立札、看板の類は選擧事務所を設けたる場所の入口より一町以內の區域において二個を超ゆることを得ず

(ト)選擧事務所に揭出する標札にありては一枚標燈にありては電燈又は提灯一個に限ること

(チ)選擧運動のためにする文書圖畫は選擧の當日に限り投票所を設けたる場所の入口より三町以內の區域にたいては頒布し又は揭示せざること

(リ)本人の承諾なきに議員候補者推薦狀にその名義を記載するは文書僞造罪を構成すべきに付注意すること

(ヌ)文書圖畫は航空機上より頒布せざること

(ル)演說會において選擧に關する文書圖畫を手交することは面接運動となる虞ありこれをなさざること

(ヲ)立札、張り札、看板の類は承諾を得ずして他人の土地又は工作物に揭示せざること

(ワ)他の引札、張り札等の類を毀棄するは選擧の自由を妨害したるものとして違反となること

△注意事項

一、旅館、旅料屋、飲食店、貸座敷、貸席など客の來集を目的とする場所に選擧事務所を設置せざること但し事務所設置期間繼續休業するものはこの限りにあらず

二、選擧事務所などにおいて酒肴は勿論饗應に涉るが如き程度の飲食物を提出せざること

三、選擧事務所には選擧に關する心得事項の概要を標示し置く事

四、慰勞會、懇親會、祝賀會など名義の何たるを問はず議員候補者、選擧運動者若くは選擧人を交へたる宴會はこれをなさざること

五、選擧運動者は酒氣を帶て運動に從事せざること

六、議員候補者の政見發表に直接關係なき新聞紙雜誌その他の印刷物を選擧人に無代配布をなさざること

七、政見發表、宣言書その他選擧に關する印刷物と雖出版法新聞紙法の適用あるに付注意する事

八、選擧運動に使用する印刷物には煽激の文字及諷刺的圖畫を表出せざること

九、協定事項は必ずこれを嚴守すること

實感社句稿

二月　小川郷 松本松甫

降れかしと待つ夜もありぬ梅見月

如月の夜をこめて友と謠ひける

如月や亦しても今日し風募る

如月や野川に寫る空の色

同　若松超堂

二月の灯霞這ふ野邊に明滅す

雪となならん風つめたさよ二月空

如月の日溜りにある風ほこり

陽溜りに工夫晝餉や二月土堤

同　吉岡獨歩

如月や老櫻依然晋に耿る

如月の陽光まばゆし古疊

福壽草の業となり果てし二月か那

二月や市を彩どる莖立菜

讀者欄

取繩を怨む　淺野生

何れの世何れの頃とも覺えず去ゝ所にいとも目出たき長者在りけり。遠き昔より連綿として打ち續きたる由緒正しき家柄にぞ聞えける所領ノ田園廣大にして財寶庫に滿ち、一家一門富み榮えけるに、わきて主ノ長者性來寛仁ノ大度備はり殊に敬神の念篤く、下を憐れむの心深かりければ多くの里人等は主とも親ともうち仰ぎてうやまひ尊まぬ者はなかりき。

この長者には幾多の子供ありけるが兄弟仲至つて睦まじく、無事圓滿に暮しける程にフトしたる機會より不慮の災ひ起りて、さしも長閑なりし長者の家も俄に荒き波風の立ち騷ぐに至れることそ、うたてかりけれ。事の起りは末子の某なる者が或る惡漢にそゝのかされて、いみじき僻事をたくらみたるに因るとかや

その頃ほひ隣りの里に赤鷲九となん呼べる惡漢住みけり。この漢は世にも比ひなきねぢけた曲者にて畏くも大切なる主親を害ひ奉り、その財產を橫領したる程の天人倶に許さゞる大罪人なりき。彼は長者の末子が性來愚鈍なるに目を着け言葉巧に云ひけらく「たん身は末の子なれば今の儘にては家法に依りてその財產も相續とこそなれ、たん身は何の得る所なかるべし。同じ人間に生れながらさ不公平の事やあるべき我等が爲せる所をこそ見習ひ給へ」などと聞くも恐ろしき惡計をぞ數へける。

末子の某は元より頭の惡き聊か物足らぬ男なりければげに左る事もあるべき乎とひそかに心移しけり危きこと云はん計りなし。然るにこの事フト仲の兄の耳に入りしかばコハ由々しき家門の一大事なり、打棄てゝは置かれじと或る日末弟に詰め寄りて爭意見、二言三言云ひ爭へる內、耐まり兼ねてか遂に弟を刺し殺しすぐその足にて奉行所へと自首し出でぬ。

長者が家にてはこの珍事に上を下への大騷ぎとなりけり。中にもお袋のお民をなん云へるは流石女の淺墓さ只管に末の兒の殺されたるを歎き悲しみて、氣も心も顚倒したりけんこの兒の不心得は棚に上げて仲の兒の苦心を察しもやらず、却てその短慮を怨みつらみ、家の內を狂ひ廻りて喚き立てたりと聞きつるこそおぞましけれ。

さて亦この樣を目のあたり見たる里人等は、聊か興醒め顔になり、昔よりの諺にも「盜みする兒は憎からで繩取りが怨めしい」と云へるは之なんめりなどとその頭田の畔道の往き來にも此の噂とりくゝなりしとかや。穴賢。

明日の吉凶

舊曆二月六日　新曆三月十六日

▲一白 着々實行に取掛かるべし必ずや次第增大す▲二黑 外に在りては不快を招き易き日神參りでは吉▲三碧 本分に專念なる時は自然の幸運を見るべし▲四綠 枝葉に捉はれず大体を守りて進退すべし▲五黃 一苦勞ある日小さき事と雖も油斷すべからず▲六白 ねい餘を收め內に在りて英氣を養ふべきこと▲七赤 打つ打たれつ應接に暇なき變化のある日▲八白 奢りは我が身を削り食らふに同じ質素が第一▲九紫 眼前神佛の慈光に浴する心地ある吉日

講談 幕末純情 狂恐亂髮

(184)　渡邊默禪作　宮野歌春畫

舟は今枕橋を右に見て墨田の中流を溯つてゐる。暖む水は麗かな日影を揉み碎いて、オパール色の輝きを都鳥の足に彫む波紋の上にきらめかせ、堤から斜めに吹く風は散る花片をくるくると蝶のやうに舞して無情らしく水に突落してからそれを知らぬ貌に發れる句を美人のたもとに投込んで春を囁きつゝ通り拔けて行く。

「八重一重、山も朧に薄化粧、娘盛りはよい櫻花嵐にちらで主さんに逢うてなまなか跡悔む、恥かしいではないかいな」

「ヨーくゝ、あざやかくゝ」

と美形の側から扇子で煽き立てゝ

「コウ、音八、今のの唄は凡で櫻づくしとも爲やうか、萬一外のを歌つたら御祝儀それ取上の罰杯三獻といふ趣向はどうだ」

といふのが富藏で、もう顔がオビンヅル式にてらくゝと光つてゐる。

「む、こりや一段と面白からう。併し藤屋の大將、女だちばかりを困らせるのが能でもあるまい、その代りに我々の談話も一切花づくめ花に緣のない言を用ゐんといふことにして萬一違背の者は今日の勘定承はるといふ約束はどんなものぢや」

「結構、合點だ」

「では直と是から御布告を出しますわ、さア花づくしくゝ、多分のはなにありつきたいと思ふ者は、鼻の高くなる名洒落をドンと散らしたりくゝ」

逸齋も上機嫌である

「はなはだ嬉しい譯で、此の延孝なんぞア鼻が大かいから、默つてゐてもお客樣は此の鼻を見逃しッこは無いんで、些と綾かつて置けつてんではなどといふ結構な御供物をそなへて下さる、お蔭さまでそのはなで息を吐いてゐられるから、是れ即ち鼻の下のくうでん、御信心のともがらは御賽錢を上げられませう、はなかしこくゝ」

と駄洒落るのが幇間の延孝

「眞にねね、延孝さんの鼻ばかりはピンと上野方へ揚つて橫つちよの飛鳥山の方へアグラをかいてゐるねい獅子の洞入に緣のある牡丹餅鼻、物を食ふ時なんぞは鼻息が荒くつて、まるで嵐のやうな此の嵐にかゝつちやアどんな御馳走でも落花狼藉、猪の飛出した跡のやうだわ」

と藝者の音八は冷かす。

どつと一度に笑ひ聲が起つた。斯くして船はそのさゞめきに乘せて儘向島の三圍神社前の棧橋へ着いた、

「さア、お上りなさいやし」

ともの方で船頭の聲がした。ぎゝうと舵が鳴る。此時、勘太郎は何處を走りつゝあるか。

船頭の肩へ捉まつて、ひよろくゝしながら棧橋へ飛上つた富藏は一番乘、續いて藝者の音八、お菊、おこん、梅次の四妓が舟から出たしんがりは太鼓持ちの延孝と逸齋。今年の花は去年の花に異らぬ今が見頃の一重櫻は薄江ゐの橫雪を若草けむる長堤に曳いて碧瑠璃の空を漏らさぬばかりに、錦のトンネルを造つてゐる逗めがたき春の神の果敢なき、永くこうの面影もなくし淡夢のそれの如くに散りそむる今宵か明日、此處が命の榮光時である」

スッポン飴　一圓　三圓
スッポン酒　二圓
スッポンヘモクロビン錠　三圓

平町五丁目角 山野邊藥局

募集

成田山大護摩修行團体 四月六日出發

一期日〔平驛發 午前六時五十九分 成田着 午後二時 翌日午前成田解散〕
一會費 金八圓五拾錢 但片道汽車賃、中食、宿泊料、箱札一等坊入外解散迄ノ諸雜費一切
一申込 本月二十五日迄ニ會費御持參御申込ノ事

昭和四年三月吉日
講元 井上貞治郎
◎之ヲ以テ講員各位の御通知ニ代フ

生徒募集

☒婦人にも職業の必要な時代が參りました そして婦人に最もふさわしい職業は……
產婆・看護婦でしよう
一ケ年で卒業が出來、收益も多大で又家庭の一助ともなる產婆及看護學をお薦め致します
(入學無試驗)
平南町 平產婆看護婦學校 清野きよ 電話三〇七番
☒申込期日四月八日迄

毛糸
防寒用には 丈夫で暖い 英國製毛糸
一オンス 十九錢 二十五錢
手藝材料 ハシモトヤ糸店 平町田町

世界的發明
燃料の革命來る
燃料として一番經濟な重油を使用する小形重油燃燒機の出現!
專賣特許 自働重油燃燒機
(ファストオイルバーナー)

本機は燃料の研究大家綠川氏が多年の考案に依り發明に係るもので、世界各國共に最も經濟なる重油を小形燃燒機により一般的に使用せんものと發明に苦心研究されつゝありしが、未だ完成に至らざるに先だち綠川氏の發明による理想的小形自働重油燃燒機の完成を見、數種の特許權を得たる事は我國の最も誇とするところである、一般燃料を使用する營業者は勿論、又一般家庭風呂に使用して理想的のものであります、從來のオイルバーナーは電氣又は蒸氣の附屬設備を必ず要したものですから、不經濟且つ面倒なものでありましたが、ファストオイルバーナーは何等の附屬設備を要せず、如何なる場所にも單獨に使用し得る獨得の構造を有して居りますから釀造家、浴場、病院、旅館、料理店、製絲家、製菓業、クリーニング業及一般燃料を使用せらるゝ營業者、一般家庭風呂等從來の石炭、コークス、瓦斯薪炭等を焚いて居る所に直ちに利用が出來ます、火炎は白色の完全燃燒で煙も油燒もなく、從つて危險ノ虞れもない最も理想的なものであります。

同一火力に於ける燃料比較下の通り

重油	五合	六錢
石炭	十斤	十五錢
薪	二貫五百匁	六十錢
瓦斯	十八立方尺	四十錢
電氣	二十五キロワット	一圓
コークス	九斤	二十五錢

定價 金七十五圓

重なる納入先
(東京市役所、日本赤十字社、橫濱船渠株式會社、ライジングサン本店、帝國精糖株式會社、郵船會社、製菓會社、其他各社、洋食店、クリーニング業社、釀造定病院、浴場、製絲家、旅館、料理店等)

實驗公開場所 平町田町 關內油槽所內
三月十六日 午前十時より午後四時まで

東京 液体燃料株式會社

代理店 平町二丁目 關內正一商店 電話一八六三九番

特約區域 (石城郡、双葉郡、田村郡、郡山市、安積郡、岩瀨郡、東白河郡、西白河郡、石川郡)

禮服の色直しと 近親結婚廢止
料理は粗末に節約本位 平矯風會の申合

平町の青年子女より成る平矯風會では生活改善の根本を革むる爲め取敢ず結婚式の樣式を簡易に經濟的ならしむべく石城方面共濟委員會と共力その趣旨の實行に移る事となつたが結婚式に對し差し當り改良を加ふる點を擧ぐれば左の如し

一、結婚式は自宅又は神聖なる場所に行ひ料亭は避くること
一、新婦及聟養子の入籍は結婚式當日これを行ふこと
一、披露の催しは簡單を旨とし招待客は近親者に限ること
一、結婚の通知はこの限りにあらず
一、結婚の仕度は簡單とし禮服の如きは一通りとなし色直しを廢し訪問服一揃、外出着一二揃、平常服二通位までにすること其他は有價證券又は通帳として持參せしめ利子を以て年々補充をなすは如何
一、嫁仕度を他人に披露することを廢すべし
一、結婚費は禮を厚くし節約を旨とし虛榮的料理を廢し披露の際接徒の意味に於て藝人等を呼ばぬこと
一、祝儀品は虛飾を避け祝儀返しを廢すること
一、相互に自己の健康狀態が結婚に適するや否や考慮した上に婚約をなすこと
一、近親結婚及幼少よりの許婚などはなるべく避くること
一、當地方の弊風たるあみだの光途中の妨害等絕對になさぬこと

郡下町村農會の 役職員協議會
けふ元郡衙で

町村農會役職員協議會並農會實行組合協議會は十五日午前十時から平町元郡役所內に開催した、昭和四年度農業の協議事項次の如し

一、前年同樣專任技術員產業技術員及囑託技術員を置き農業諸般の獎勵指導調查等に當らしめ農業知識の普及向上を圖らんとす
二、農事講習
三、町村採種圃設置獎勵
四、優良農具獎勵
五、病虫害驅除豫防法
六、副業獎勵
七、品評會獎勵
八、表彰
九、共同作業獎勵
十、蔬菜種圃獎勵
十一、畜產獎勵
十二、婦人農事講習會
十三、農具販賣斡旋
十四、農事相談所
十五、町村農會補助

打合事項
一、技術員設置に關する件
一、自給肥料增殖に關する件
一、中堅農民養成講習に關する件
一、三德碎貝殼に關する件
一、最新出版物紹介に關する件

戲曲 大越中佐の死（五）
小崎武

（一氣に此處まで書いて少佐は手を休めて一息つき探るやうに濱島の方を見ると、濱島は少佐の書く文字の一畫一字が背囊をとほして彼の腕と膝とに傳へる微なる震ひが彼の胸には五寸釘を打れるよりも强く響くので、眼を伏せてしまつてゐる）

少佐 （口邊に微笑を浮べながら、再び鉛筆を運ばせて書き續ける）

（特記）遺懷書の字句は舞臺では觀客には分らないのであるから以下最後の數行は後段との關係上此處には表はさない。

（少佐は記し終ると初めから讀み返して、それを折つて封筒に入れ、宛名と署名を記した後左の手頸の腕時計を覗いて――三月七日午後六時三十分於李官堡南方無名部落西方畑地と記入して表書きを終る）

少佐 濱島一等卒
濱島 はい（頭を上げる）
少佐 （書狀を差出して）これを持つて行け、そしてお前の口から詳細に申上げてくれ
濱島 は、畏まりました（書狀を恭しく受取つて上衣の奧深く納め、背囊を背負ふ）
（少佐は圖囊の中から地圖や書類を取出してゐる濱島が銃を執つて立たうとする）
少佐 待て（濱島は再び折敷く）これは機密の地圖や書類ぢや、敵に奪はれるやうなことがあつてはならんから、裂き捨てゝしまひ度い手傳つてくれ。
濱島 は。
（地圖と書類が二人の手でズタズタに引き裂かれてしまう。やがて少佐は上衣の內ポケットから白紙の包を取出し）
少佐 （押し戴いて）これは勅語の寫しぢや
濱島 （ハッと姿勢を正す）
少佐 去る一月三十日黑溝臺の激戰に際して、深く將卒の勞苦を察し其功績を嘉すと仰せになつた勅語の寫しぢや、お前も定めし拜聞したらう。
濱島 はい
少佐 こればかりは勿體なくて、破り捨てることは出來ない、しかし苦しもの事があつては不敬の至りぢや（再び押し戴き包を開いて寫しを手にし）恐れ多いがこうして……（寫しを丸めて口へ入れる）
（濱島は思はず頭を下げる、少佐はぐつと嚥下したが、此時心身の衰弱はいよ〳〵加はり、殆ど腰をかけてゐるのに堪ねない位である。しかもそれをじつと堪ねて）
少佐 （努めて快活に）濱島、それからこれはな、世話になつた御禮だ。お前に遣らう
（双眼鏡を肩から脱づしてサックのまゝ差出す）
濱島 はい有難い次第でありますが、一兵卒の私が斯樣な貴重な品を戴きましては……
少佐 いや〳〵、その點はよく分つてゐる。兵卒が將校用の双眼鏡を所持して居ることがつまりわしの贈り物のためにお前が迷惑しては、誠に心外千萬ぢや後日のためにわしが證明書を書かう。それなればよからう。お前の親切に對するわしの寸志ぢや。是非受けてくれ。
濱島 （今は斷るは反つて非禮と）はい（兩手をさし伸べて）少佐殿、有難く頂戴致します。
少佐 おゝ、受けてくれるかそれでわしも滿足ぢや
（双眼鏡を握る四つの手が感激にふるへて、二人の頰を淚が流れる）
濱島 （つと顏を上げて）少佐殿、私に特別にたいひつけになることはございませんか。
少佐 遺言か。
濱島 え……いゝえ
少佐 何もない（その眼は大悟の前の水のやうに澄んでゐる）
濱島 （覺ねず）では、あのお留守宅のお處は（尋ねて後でハッとする）
少佐 （落ちついた聲で優しく）それを聞いてどうするのぢや（少しほゝ笑んで）よし〳〵

石城選擧人數
合計三萬七千九百三人 町村の資格者別

石城郡下各町村に於ける議員選擧は來る五月初旬より六月下旬に亘り執行の筈であるが確定せる選擧人總數三萬七千九百三人にして各町村別に記せば左の如し

泉七四八 渡邊四一一 植田一〇二〇 山田六五〇 錦六七九 勿來一四二九 上遠野九一七 入遠野八三九 川部七二四 田人村組合九五五 平三八三九 飯野六二八 夏井五一〇 高久四九八 豐間六七二 江名一〇三六 鹿島三七九 小名濱一五一九 玉川四五四 磐崎一六九三 湯本二三〇九 內鄕四四八一 好間二〇五五 赤井一三三四 永戶村組合七四四 澤渡村組合八〇一 神谷六七八 草野八四五 大浦八三七 四倉一三五七 大野七八九 平窪六二八 小川村組合八二一 川前六二四 合計三七九〇三

片倉磐城製糸 五月末竣工
女工は三百名

片倉磐城製糸株式會社新築工事は豫定通りに進捗を見既でに女工寄宿舍三棟、水漕場等は略完成し目下機關室、操業等の建築を急いで居るがこの全部の建設費は實に五十萬圓を要するものである、なほこの儘順調に進めば五月中旬遲くも五月下旬までには竣工し六月から操業を開始する事が出來る、なほ操業開始當初は女工約二百五十名をたく豫定であると

石城の酒造 六百石の減
殘米なほ千俵

石城郡內に於ける昭和三年度の淸酒造仕込は全部終了したが造り込の實際高は二萬六百二十石で前年の造り込高二萬一千二百五十五石に比較して六百三十五石の減である、これは財界不況の結果であつて造り込開始當初は前年度と殆ど同樣に豫想されてゐたが稅金の納入其他の關係で造り込を減少されるの已むなきに至つたもので淸酒家は約千俵以上の殘米があり酒造家は處分に大騷ぎである

妾二人を持てば 色男女難の卷

平町六丁目佐藤ます(三八)と仲間町小林靜江(三二)の兩人は同町胡摩澤請負業橋本嘉一郎(四〇)の妾であるが嘉一郎は常に靜江に對し「俺はますとは何等關係がないから安心して居れよ」と云ひかせて居た、然るに十四日嘉一郎はますの自宅に居たことを知り靜江は「何等關係のない女のところに」とは怪しからん」と嫉妬の餘り同日午後三時半頃ますの家を訪れて見ると意外にも嘉藏は同家の炬燵の中に寢てゐたので靜江は物をも云はず座敷內に踊り込み惡口を叩くや、ますは他人の家に無斷に入るとは怪しからん、と云ふ大騷ぎ斯うなつてと二人の妾は大亂鬪を始め傍にあつた器物を破壞するは色男の嘉一郎も默つて居られず双方鎮めやうとしたが嫉妬心の頂上に達した妾同志は益々猛りたちますは爐中から灰をつかんで靜江に投げつけ又靜江は携へて來た藥壜で右額をなぐりつけ長さ一寸の傷を負はせた大騷動に附近の人々かけつけ取り靜めたが平署に告訴すると

柿栽培改良
石城分場の試み

石城郡地方に於ける果樹の栽培は最近非常に發達し產出果實も信達地方と比肩する位になつて來たが農事試驗場石城分場では柿ノ栽培について改良すべき點の多いのを見て種々研究をかさね欵似盃型について試驗を行つた處非常な好成績を納めることが出來たので近く研究の結果を發表し一般に獎勵する事になつた、この栽培法は梨、桃等と同樣な栽培をするもので、從來柿は自然木の儘になつてゐたのであるから此栽培法が實施されると第一土地が儉約されることになり一般からも此の發表が期待されてゐる

松雲書伯と語る
書畫の精神に就て（一記者）

平町辯護士千葉彥治氏と親交ある書家齋藤松雲書伯は日本畫の大家として夙に令名を馳せ中央に名を成してゐるが今回の來平を機に同好者相倚り來る十七日平町に書會（別項廣告通り）を催す事となつた、左記は記者が十四日夜來平した松雲書伯を宿舍に訪ひ大要聞き得た先生の一見識である

吾人生存の意義目的たる剛健は心身の淸にして而して秩序があれば宜いのである之れに因て吾人社會が活躍し國家が安泰なのである此信條は誰も疑あるまい然らば人生萬事之れを基本として行動せねばならん予の多年修業し唱道する書畫道も亦た一切此意義に據るのである然るに現代の美術文藝の上に此意義と反對なる不淸淨不剛健不秩序の現象はないか予は多々之れありと思はれ從て變な思想も具体的に感得せられるのでないか諸君の冷靜なる判斷に任かせ詳論するに及ばない予は書畫道を表面として抽象的に御話しをし作品現物に就て觀るべき觀察をせられんことを望むのである第一畫と繪模樣との區別、畫と文字との區別を明確にしなければならん畫と書が同一にして繪模樣と文字が同一で畫と繪模樣が別なのである世間多くは物と形と色を描いたものは皆畫だと言ふか夫れは傘や提灯に書いた文字は文字であるが書でないと云ふことは誰でも分かる之れを畫の方に應用して考へれば繪模樣との區別が分かる予描かんとするのは此眞の繪なのである即ち書道に依る一筆を以て鮮明に物象を現はし糊塗する所の無いものが東洋繪の眞髓にして染め物や塗り物と違つて要點である染め物や塗り物ならば機械の作用で足り人力を煩はすに及ばない苟も人力を煩はすものを尊重する所以は物象を組織するが面の線と點に於て筆墨運用の縱橫なる所に作者の僞はらない性格修養の程度が現はれ機械以上の妙味を見るからである其筆墨の運用は書道である書道の根本は心靈の修養である書畫幅及び扁額は敬意を表らへき物象と文言を要することは諸君の知る所であるならば吾人の心靈に觸れ眞の快感を得らるるものを撰ぶにある此の眞の快感を得んには言ふまでもなく筆墨の精粹剛健にして秩序あるものに反して運筆の軟弱、用墨の汚濁なものは如何ん感は加ふに雜色を以て糊塗し醜婦の冶郞に諂を强要する樣のものは如何家庭の首腦たる床に掛け又は頭上に揭ぐべきか我神國民族の熟考すべきことと思ふ」云々

因に今回松雲書伯と共に來平した東京柔術表裏條意研究會長一條矢丙先生は書會席上その他の需めに應じ柔術の極意と進歩せる一條流人術病敵退治の相談に應ずる筈である

巡査の惠み
哀れな家に 一家三人助かる

石城郡山田村金子炭礦坑夫佐藤淸信(三八)妻シツ(三〇)は產がもとで氣狂ひとなり、七歲を頭に三人の子を抱へ妻の看護や吾子の敎育に働きに出るひまもなく、貧に苦しんだのを知つた同村駐在巡査が同情し昨年十二月から己の薄給をさいて何くれとなく世話してゐる

原田所長來平

福島地方裁判所長原田氏は本間監督書記と共に十三日來中湯本町に一泊十四日午前中支部を訪問巡視して同十一時歸福した

中堅農民講習會
三十日間の講習を了へ けふ修得證授與

石城郡農會主催石城中堅民農養成講習會は三十日間の講習を終り今十五日午後一時から平町元郡役所內に於て第一回講習修得者ノ修得證授與式を擧行し佐瀨縣農務課長、野村縣農技師其の他多數の出席あり講習生の答辭ノ終つたが修得者次の如し（△印は精勤受賞者）

（大浦村）△高崎嘉雄△根本榮吉△佐久山保三郎（大野村）△大和田廣三郎△本村昰△渡邊忠美（赤井村）△矢野恒平△猪狩一司△松本明、宮內喜候平澤角右エ門（神谷村）△箱崎惣治△國井貢△鈴木權藏（草野村）古市喜一鈴木茂△江尻傳（小川村）△箱崎德一、市川嘉績（錦村）△金成龜太郎、助川正壽（上遠野）△石森貞一郎（平窪村）△吉野佐榮鈴木貞雄、福田長一郎、吉田武雄（好間村）△中村慶治、猪狩勇、渡邊村）△水野直記△小野秀雄、岡部宗平（泉村）△堀春夫（內鄕村）中村孝明、吉田喜一（飯野村）小野善秋山野邊喜一（磐崎村）中野幸與、小泉恭平、御代正雄酒井嘉久治（勿來）中野烝

自動車の御用命は
昭和タクシーへ
高級車で乘心地好い
昭和タクシー
電話は 三四三番
サシミ

生花免許狀授與

福島縣石城郡平町六丁目
華道家元龍生派池坊
生花敎授 正木旭松

敎員免許狀	勿來	安島あき子
皆傳	平	岡田リキ
皆傳	平	平塚ムメ
中傳	植田	柴キヨ
初傳	平	大河內イノ
初傳	錦村	小松カイネ
初傳	高久	鈴木ヤスヨ
初傳	平	志賀ヒデ子
初傳	平	岡田房子
初傳	泉村	村上テツヨ
中傳	平潟	鈴木マツ
初傳	平潟	鈴木勝代
中傳	平	鈴木ヤス
初傳	平	鈴木キン

右者日夜勉勵成績優良ト認メ茲ニ免許狀ヲ授與ス
昭和四年三月十五日

靴製造ト修繕
並に附屬品一切
大勉强
深谷卯三郎靴店
平町堤ノ內二三二（電話呼出六六五）

內科 小兒科 皮膚科 花柳科
平町舊城跡（城山）
青沼醫院
醫學士 青沼淡夫
電話 四〇三番

松雲書伯書會開催

書家齋藤松雲先生は書畫、詩文其他東洋文藝ノ精髓に通達し其の行くとして可ならざるなきは世上具眼者の夙に認むる處にして先生ノ來平を機に左記要項により書會を開催し以て先生の卓越せる東洋美術ノ發揮に資せんとす、大方同好の士、希くは御贊助あらん事を。

發起人 千葉彥治 鈴木辰三郎 門傳淸吾 山田勇太郎
後援 磐城新聞社
齋藤松雲書伯書會

一、日時 昭和四年三月十七日
一、場所 平町驛前 丸新館
一、會費 甲 絹本尺二 金廿圓 乙 紙本尺二 金十五圓

◆同日午後一時會場に於て粗餐を呈す